

素材採取家の 異世界旅行記

MATERIAL COLLECTOR'S ANOTHER WORLD TRAVELS

13



木乃子増緒

KINOKO MASUO

レムロス夫人

マティアシュ領の
領主様。

タケル

ひょんなことから
異世界で「素材採取家」
となった本作の主人公。
食べることと
お風呂が大好き。

ビー

タケルの相棒の
子ドラゴン。
タケルとカニが
大好き。

ザバ

ルカルウのお供の
へんな生き物。
よくしゃべる。

ルカルウ

ある日、空から
降ってきた幼子。
しゃべれない。

スツス

□癖が「～っす」の
愉快な小人族。
忍者みたいになっ
た。

ユムナ

謎の種族
「アルナブ族」の少女。

主な登場人物

1

生きることは食べること。

食べるために生きていると言っても過言ではない。

生きるためだけならば食にこだわらなくて良いのだ。

より美味しいものを求めるのは人としての業^{わざ}というか、元日本人としての魂^{たましひ}に刻まれた呪縛^{じゆばく}というか、ともかく生きるためにはいろいろと楽しんでたほうが勝ちだと思^{おも}っている素材採取家のタケルです。皆さん、より良い食生活を送っていますか。誰ですか食材採取家と仰^{おほしや}るのは。間違^{まちが}ってはいませんよ。

俺が所属するチーム蒼黒^{そうくろく}の団^{だん}の食生活は、とてもとても豊かである。

マデウスにおいて通常一日二食で済ませるのが常識^{じょうしき}だとしても、俺にその常識は通用^こ用しない。朝と晩^{ばん}だけ食べるなんて、お腹^{なか}空^そいちやうじやないか。

俺たち蒼黒の団は一日三食おやつつき。各々小腹^{こはら}が空いたら木の実とハチミツを煎^いった携行食もどうぞ。しかも、美味^{おい}しいのが当たり前^{あたりまえ}の食事を提供^{ていき}しています。

まず何よりも俺自身がひもじい思いをしたくないため、元気に働くためには腹いっぱい^{はらいっぱい}に食べな

くてはならないと考えている。

腹いっぱいになれば何でもいいと言う人とはちよつと仲良くはなれない。食うのならば楽しまな
ければ。

かつたい干し肉と酸っぱい葡萄酒を一日二回、もそもそと食べて飲むのが冒険者。モンスターが
蔓延る深い森の中で悠長に焚き火をして調理をしていられないから、という理由はある。それはわ
かる。腹が満たされれば早く仕事ができるしね。わかるよ。

だがしかし、俺には前世からの業というか日本人の飽くなき食への追求といえますか、変態的に
まで食に貪欲というか、一度覚えてしまった味が当たり前になってしまつと不味いものを口に入れ
るのがぶつちやけ嫌つていうか。

嗚呼、アルツェリオ王国の王都で食つたデロデロのおかゆ的な汁状の食い物を思い出すたびに悲
しくなる。現地の貴族に大人気らしいということと食つたのに、あれは酷かつた。同じものを作れ
るかとか聞かれれば、小麦粉を練つてちぎつて水溶き片栗粉にぶちこんで混ぜて少々塩と砂糖で熱
したらでき上がるだろう。素材の味を生かしてみました。

いや、もつと複雑な工程があつたのかもしれないが、少なくとも俺の舌は複雑な味を感じなかつ
たのだ！ せめて、野菜を煮込んで出汁を取るとか！ 細かく砕いた肉を入れるとか！ 「貴族に
人気」が免罪符になると思うなよ！

まあ落ち着こう。終わったことを嘆いても仕方ないことだ。

あの謎汁は握り飯屋が流行すると同時に消えていったけどね！ 少しでも金を稼ごうとしたヤツ
の陰謀ではあつただけども！ 庶民も食わないような古麦を材料にしていたらしいよ！ 酷い
話だ！

いやまあ落ち着こう。三十円も出せばうまいスナック菓子が食える環境で育つた記憶がある俺の
舌を基準で考えればきりが無い。

アルツェリオ王国内の流行というものは高位貴族が作り、そして次第に庶民へと浸透し、王都か
ら郊外の町や村へと伝わる時には一昔前の流行と言われてしまう世界だ。貴族が良いと言え
ば、それは良いものなのだと庶民は思う。

極端な話、頭にちくわをぶつ刺してこれが今のお洒落さますよと言われれば、ああそうなのね素
敵だわ真似するわの世界。

あの謎汁がトルミ村まで来なくて良かった。ほんとに良かった。謎汁が好物だった人には申し訳
ないけども、他に美味しいものはたくさんあるから。

話がめちゃくちゃ逸れまくつたが、つまりは俺にとつての食は生きるための手段、娯楽、喜びな
のだ。

俺と志を等しく、食つたためならばランクSモンスターも嬉々として狩る仲間たちがこのたび大
幅なレベルアップをした。

ドラゴニユートのクレイは魔力を操れるようになり、理性が吹き飛ばす狂戦士から強い力を制御し

操る竜戦士へと進化。見た目もちよつと大きくなっていたから、これはもう進化と呼んで良いだろう。

ハイエルフのブロライトは俊敏さが増し、アクロバットな動きに加え美しい白刃のジャンピーヤで勇猛に斬りつける姿はまさしく狩猟戦士。そして魔力を大量に消費するプロジェの弓の腕を上げた。

小人族のスツスはまさかの忍者に職業変更。もともとの隠密技能を進化させ、短期間で隠密殺傷という異能を身に付つけた。素早さと気配を消す能力はチームの誰よりも優れている。料理は俺よりも上手。

そして、ちびっこ竜である我らがマスコット、古代竜の子供じー。

俺に内緒で巨大な竜へと変化する能力を身に付けていやがった。いや、成長したのか？ いやいや、成長したにしては中身がまったく変わっていないのだが。朝は早く起きられるようになったが腹が減ったらわめきだすし俺の姿が見えないとわめきだすし俺が小動物と戯れていると嫉妬でわめきだす。可愛い。

どんな鍛練を積みばちびっこ竜が巨大な成竜に成長できるのかは謎だが、相手は古代竜という名の神様だからな。なんとかなったのだから、そこを追及するのは無粋というものだろう。

なにはともあれ、チーム蒼黒の団は大幅な戦力増強となった。俺もちよつとだけ魔法の扱いが上手になりました。

レベルアップをして食う量が倍増したという謎もあるが、それはまあ置いておく。たくさん食べるのは良いことだ。たくさん動くことだし。

トルミ村に落ちてきた有翼人種のルカルウとその守護聖獣ザバ。

空飛ぶ島から落つちてしまった二人をなんとかして帰りたいと思うのだが、なんせお伽噺だと思われてきた幻の有翼人の国、キヴォトス・デルブロン王国がどこにあるのかわからない。存在を隠し、マデウスの空を飛んでいた国。

さてさて、俺たち蒼黒の団はルカルウとザバを故郷に帰すことはできるのだろうか。

そして未知なる場所で新たなる食材、いや違う素材を探すことのできるのだろうか。

そろそろ味噌が欲しいんだよね。醤油の実があるのなら、味噌の実とかあるんじゃないかな。あと獅子唐と茗荷とワケギ欲しいな。

探そう。

未知なる食材を！

いや違う。素材を！

+++++

飛び散る粉塵、叩きつけられる岩石。

視界の悪い最中、大地を震わせるおぞましい咆哮が轟く。

全身を凍りつかせるような、弱者を嘲るような、立ち向かえるものならかかってこいと言わんばかりの――

「ぎゃああああーっ！」

白い岩壁の谷底にひしめく、大量のカニ。

おぞましい地獄の光景、いやこの場合カニの養殖場って言うべきなんだけども。

ともかくスツスは谷に響き渡る大絶叫をしたあと、固まってしまった。

冷静に考えれば異常な景色だよな。眼下には数万匹のカニがひしめき合っているのだから。

俺にとってカニは食い物だが、冒険者にとってカニはただの不気味なモンスター。そりゃ怖いよな。

「スツス、スツス、谷の底に降りなければ大丈夫。ここは防御魔法があるから」

「なんすかなんすかあの化け物！」

「えー、あれにおりますはー、カニです」

「か、かに？ つすか？ 化け物じゃないんすか？」

「食材です」

「はいいいい？」

「美味いんすよ」

「美味いんすか!？」

カニの繁殖場は谷底にあるのだが、崖の上から下を覗けば一面にカニ。

生け簀のカニを想像していただきたい。あれの、数百倍のカニが蠢いているのだ。最高。

「あんな、あんな虫みたいなのを食うんすか？」

「あれはカニです。甲殻類……いや、虫ではないけど、食うんすよ。しかも、すっごい美味い。これは保証する」

スツスは俺のことを信じられないといった顔で見たが、俺もビーも真剣そのもの。クレイとプロライトに至っては既に戦闘態勢。久々のカニ狩りに興奮を隠そうとしない。

カニの見た目は節足動物蜘蛛類。なので、足が長くてたくさんある虫だと言うのも無理はない。

そうか。俺たちは虫を好んで食うと思われているのか。ちよつとショック。

「スツス？ スツス、おーい」

「ピュッピュ」

「固まっちゃった」

「ピユウー……」

ムンクの叫び状態のまま硬直するスツスの頭を、ビーがべちべち叩く。

「ふふ。無理もなからう。クラブ種を狙うは愚か者と言われておるほど割に合わぬモンスター故」

「わたしもタケルに馳走されるまで食えるものだとは思わなかったのじゃ」

クレイとプロライトは準備運動を終えると、谷底へと続く切り立った崖から見下ろす。

二人には盾魔石を託しているが、修業の成果を試すため今日は使わないと宣言した。

俺の想像を超えて鬼のように強くなった二人は、今すぐにでもカニ狩りを始めたくてうずうずしている。

「スッスは未だに眼下の光景に硬直したままだが、クレイは崖を降りるため進む。」

「ビー、スッスが我に返るまで護衛を頼む。慣れぬ場故、焦らせるな」

「ビューイッ！」

「プロライト、粉塵を抑えられるか。ビーより小柄なものは捨て置け」

「了解じゃー！」

「槍とゲンコツ禁止な。剣で関節を切るようにしてくれ」

俺がクレイの指示に追加すると、二人は頷く。

「スッスにも経験を積ませるべきであるからな。ある程度は残す」

「だからって初戦がダウラギリクラブの養殖場でもいいの？ もっとほら、見た目が気持ち悪くないモンスターのほうが良くない？」

「お前はカニが食いたくはないのか」

「食いたい」

「ならば我らの好物なのだと説明するよりも、見たほうが早かるう」

クレイはさも当然のように答えたが、スッスは前線で戦っていた冒険者ではない。危険なこととは無縁の情報屋だった。

蒼黒の団の新規加入者であるスッスは、俺たちの邪魔にならないようになりたいとつとクレイに言った。

いや、料理ができる時点でスッスが邪魔になることなんて生涯あり得ない話なのだが、スッスは律儀に戦闘でも役に立ちたいと言った。

壮絶な修業を経てスッスは、隠密というか、暗殺集団リルウェ・ハイズの客人というか、いわゆる忍者に転職したわけだが、実戦経験は乏しい。

経験を積ませるためにもいくつかの依頼を受注し、消化すればいいと思っていたんだけど。

「トルミ村近くの森にいるでっかい牛、何て言ったっけ。角が四本あるイノシシみたいな牛」

「ランドブオイであろう」

「そうそれ。その牛でもよかったじゃないか。あの牛美味しい」

「そもそもはお前がカニを食いたいと言いだしたのが始まりではないか」

はいそうです。

俺たちは今、アルツェリオ王国内フォルトヴァ領にあるダウラギリクラブ養殖場に来ている。

俺が勝手に養殖場と呼んでいるだけで、実際は獷猛なモンスターであるダウラギリクラブの繁殖地なんだけども。

ここはチーム蒼黒の団がフォルトヴァ領主からもらった土地だ。

フォルトヴァ領主はルセウヴァッハ領主であるベルミナントと懇意にしており、そのツテでこの土地を借りられないか尋ねたのだ。賃料だって支払うつもりだった。

だがフォルトヴァ領主はこの土地を、危険なダウラギリクラブの繁殖地をまるごと蒼黒の団に譲渡した。むしろ管理してもらえないのならどうぞどうぞと。

フォルトヴァ領としては厄介なモンスターを無償で退治してもらえし、蒼黒の団が懇意にしている近くのシャバリン村も安全になるし、ついでに「蒼黒の団が近くで演習している」となればシャバリン村の観光にもなる、って。

俺たちは演習をしているわけではないんだけど、カニ狩りするんです、って言ったら実戦経験を積むということだな、と勘違いされてしまった。

冒険者のなかには俺たちの実戦を見せてほしい、なんて希望もあった。

だがなあ。

なんというかなあ。

俺たちの実戦で。

「タケル！ でかいのが行くぞ！ わたしは蒸したカニが食べ、たいっ！」

プロライトのジャンビーヤがクレイの背丈以上もあるカニを一太刀で屠る。

「プロライト！ 腹を切るな腹を！ なるべく間接を狙えばお肉が散らない！ 氷結、展開っ！」

二つになった巨大カニを靴にしまいつつ、三メートル級のカニたちを氷漬けにする。

「太陽の槍に頼らずとも、この剣をくれてやるわ！」

悪役っぽいこと叫びながらクレイの大剣が炸裂。五メートル級のカニが数十匹巻き込まれ岩壁へと叩きつけられた。

「ピューーッピューピューー！」

「真面目に炎を吐きなさい。焦がしたら叱られますよ」

「ピューーッ！ ピューー！」

「わたくしは炎など吐きません。優雅に空を飛ぶことが仕事なのです」

「ピューーー！」

「誰が役立たずですか！」

ビーとプニさんは固まったままのスツスの両隣で仲良く喧嘩。

これが俺たちの、いつもの実戦。

緊張感はあるのだ。巨大なハサミに捕まれば、クレイの鋼の肉体すらちぎれるだろう。

ダウラギリクラブはランクBのモンスター。一個体だけならば冒険者ランクCもあれば数人で討伐は可能。

しかし、こいつらは群れで行動する。数十体どころではなく、数千体、時には数万体の軍勢となつて町や国を襲う。

以前俺たちがこの地に来た時は、ダウラギリクラブの氾濫まであと僅かという瀬戸際だった。

この地からカニが溢れたら近くの村を襲うだろうし、森の草花や動物、モンスターすら襲い食い散らかす。

甲羅も硬いし時には魔法も弾き返すカニ、クラブ種は冒険者から嫌われている。

危険だし攻撃が通りにくいし素早いし見た目がアレだしで、不人気なのだ。でかくて鋭い爪にはたつぷりのお肉があるんだけども。

この谷は魔素の流れがモンスターに対しては理想的らしく、またダウラギリクラブらは魔素吸収を効率的に行うため異常な速さで繁殖する。

以前は餌が不足していて共食いをしていたが、前回来た時に俺が谷底の掃除をしていたおかげで草花が繁るようになった。ここでもわざわざ生えていますエペペンテツテ。

繁殖場が綺麗になつて食えるものも増えれば、そりゃ元氣よく繁殖するよね。

魔素の流れ云々は古代馬であるプニさんが得意げに教えてくれたのだが、プニさんはごぼうサラダが入った壺を抱え、無表情でもしゅもしゅ食っている。あのスタイルで俺たちの応援をしてくれているのだ。

以前にここを訪れた時、俺たちはカニのあまりの美味さに食いながら戦ったつけ。よいおもいで。今回は力強い協力隊が来ているのだ。無様な戦いは見せられないとクレイが言ったため、食いながら戦うのは禁止となった。

「おっきいカニだよ！ あんなのはじめて！」

「あの爪は硬いよ！ だけど爪の根っちは柔らかいんだ！」

「お腹の真ん中もふわふわしているの！」

「目玉を潰すと動けなくなるよ！ わんわん！」

主にクレイとブロライトを中心にカニ狩りが行われるなか、その協力隊である茶色の毛むくじやらが素早い動きで倒されたカニを回収してくれた。

なんと、コポルタ族たちはカニを知っていたのだ。そして、食うとたまらなく美味いことも知っていた。

だが、コポルタ族が暮らしていた北の大陸では魔素が薄まりカニが絶滅してしまった。もうあの美味しい肉が食えないのかと悲しんでいたところ、俺がコタロとモモタを背中中に張り付かせている最中に口にした「カニ食いたいな」の一言に彼らが目を輝かせたわけです。

—— タケル、カニとは何なのだ？

—— ええっと、カニというのはクラブ種のモンスターのことでね。とっても獰猛で美味恐ろしくて……

—— クラブ種ということは、カラコルムクラブのことか？ あれは美味しいのだ！

—— 美味しいのだ！

——なにそれちよつと待って今なんてった。

コポルタたちが食べていたカニはダウラギリクラブではなく、カラコルムクラブという真っ黄色なカニだったらしい。なにそれ食べたい。絶滅したと言っていたが、地面の下に潜って隠れている可能性だってあるのだ。今すぐに北の大陸に行つてカラコルムクラブ探しをしたい衝動を全身全霊で抑える。

基本的に雑食なコポルタたちは、食えそうなものならなんでも食う。ダンゴムシに酷似したブンブンオタマすら粉にして丸めておやつ感覚で食う。もりもり食う。

臆病で逃げるのが得意なコポルタではあるが、俺たちが傍にいるという安心感だけで今日のカニ狩りに同行したのだ。

一段落したらカニ鍋やろうぜ。

「タケル、タケル、女王が五匹もいるよ！ あんなにいたら、この谷から出ちゃうー！」

「女王は怖いんだよ！ わんわん！」

クレイがタコ殴りにした比較的小柄なカニを担ぎ上げ、嬉しそうに尻尾をブン回しているコタロとジンタ。ジンタは黒豆柴の青年で、このたびコタロの護衛に選ばれた。

愛らしい豆柴が巨大カニを掲げる姿は恐ろしくシュールだが、ゲテモノだと嫌わず収穫に参加してくれるのはありがたい。

俺は雌のカニを勝手にセイコガニと呼んでいたが、コポルタたちは女王と呼んだ。

確かに三階建てビルくらいの大ささの雌ガニは女王の風格がある。

コポルタたちは総勢十名が参加。代表者二人に六畳ほどの保管庫になっている魔法巾着袋を預け、カニ回収を頼んだ。

さすがのコポルタ族。大量に積まれていくカニをすさまじい勢いで回収、収納している。

素早い動きのカニらの、更に上をいく素早さで攻撃を回避している姿は素晴らしい。なんとというか、遅いというか、頼りになるといふか、すごいぞつよいぞコポルタ。

「ああ、これじゃダメっす！ おいらも、おいらも、何か手伝うつすよ！」
スツスが我に返つたようだ。

両頬をビタビタと叩いたスツスは、意を決したように姿勢を正した。

「おいらだつて蒼黒の団になつたんす！ 恥ずかしい真似は、絶対にできないつす！」

「ピュッピュッピュイー！」

「スツス・ペンテーゼ！ 行くつすよー！」

「ピュイ〜〜ッ！」

頭にビーを乗せたスツスがほぼ垂直の崖を駆け降りてきた。

黒い覆面に黒装束が壁を走り降りる姿は、まさしく忍者。手には巨大出刃包丁。

スツスの復活に喜んだのはビーだけではなく、コポルタたちも歓声をあげ我先へとスツスのあ

とを続ける。

「硬くて切りにくいっ、ものは！ 力任せじゃ、ダメっすね！ とわーっ！」

「そうだよ！ 柔らかいところがあるよ！」

「わんわん！ 背中硬いよ！」

「豆柴軍団をお供に、スッスは恐ろしいほどの速さでカニを切りつける。あれだけ巨大な出刃包丁を片手で器用に扱い、カニの関節を一刀両断。

既に混戦状態になっているというのに、スッスは先ほどまでの醜態を振り払うべく走り抜けた。

「ジンタ！ おっきいやつは赤い袋だよ！ ちっちゃいのは白いやつ！ 中つっくらしいのはタケルに投げるんだ！」

コタロは一通りカニを集めたら、岩山の上に立って仲間たちの指揮。

俺は方々から飛んでくる中つっくらしいカニをかき集め、感慨深くコタロの姿を眺める。

俺のローブに隠れて震えていた王子様はどこへやら。

このまま一族を率いる立派な王様になつてくれたらとは思いますが、まだまだ幼いままでもいいよと思う。夜中にモモタと手を繋いで俺の布団に潜り込んでくる可愛さを、決して失くさないでくれ。他の種族の子供たちと切磋琢磨し、すすくとゆっくり成長してくれたら良い。

戦場を怖がるモモタはプニさんの背中に隠れながら両手を振っている。プニさんの指示で応援してくれているのかな。可愛い。

コボルタたちは北の大陸で体験した常闇のモンスターとの戦いを忘れてはいない。だがしかし、あれほどの恐怖はそうそうない。

「常闇のモンスターをやっつけた旦那たちが一緒にいるんす！ 怖いことなんかないっす！」

「わんわんわんわんっ！」

「わおーんっ！」

おお。

スッスが女王ガニの巨大すぎるハサミを切り落とした。

すごい！ あのカニはエコモ・ダウラギリクラブの雌。卵を守るべく雄を背中にびっちり背負い、卵を奪われるまいと怒り狂っている。

「せいこ、じゃなくて、女王の卵は壊さないように！ ウニ丼ごちそうするから！」

女王の背中にびっちりびっちりひしめく大量の卵にヨダレが出そうになる。あの卵は不思議と濃厚なウニの味がするのだ。

ウニ丼が何なのかはわからないだろうが、俺が「ごちそうする」と叫んだその一言でスッスの顔つきが変わる。

「コボルタ軍団！ 鋭い爪で甲羅からちっちゃいカニを引き離すっすよ！」

「わんわんっ！ たまご！」

「たまごは食べたことないよ！」

「美味しいのかな？」

「タケルが食べるものはなんでも美味しいわ！」

「ピュッピュイイ！」

背丈はドラゴニュートであるクレイの三倍。背負った雄ガニはちっちゃいとはいえ、女王に比べたらの話。実際は小型自動車くらい大きさがある。

ギルドの建物より巨大な女王。

並みの冒険者では足が竦み、怯え、震えだすだろう。

だがしかし、ススは嬉々として立ち向かった。

もふもふの豆柴たちと共に、力を合わせて。

「ふん。初陣でランクAのモンスターに挑むとはな」

クレイは剣についたカニ汁を振り落とすと、遠くで巨大な女王と果敢に戦うススたちの姿を眺める。

「我らですら苦戦したセイコガニなのじゃ！ ススは己が力がどれだけ強くなったのか理解しておらぬのじゃろう」

プロライトはカニ足の先っぽが飛び出た巾着袋を三つ抱え、嬉しそうに言った。

常闇のモンスターの軍勢と対峙し、あの混沌とした戦場のなかで握り飯をこさえてくれたスス。

精神耐性はそれだけで並みの冒険者以上だろう。

恐怖体験というのは、心的外傷になって動けなくなるか、あれだけの経験をしたのだからこれは大したことはないかと割り切れるか、どちらかだとクレイは言う。

常闇のモンスターの幻影に怯え竦むようであれば、ススはきつとオグル族たちとの鍛練はできなかった。

トルミ村を襲ったランクSモンスターであるウラノスファルコン。満身創痍であったとはいえ、あのモンスターに一太刀入れたススだ。クレイ曰く、技術はあるのだからあとは経験を積むだけだ。

それにしても初戦がカニの軍勢っていうのは酷かもしれないが、カニは戦いの経験を積む相手というだけではなく、舌と胃袋を満たしてくれる最良の相手。

ビーはススの護衛のつもりで飛んでいたのに、今ではただの応援要員と化している。プニさんの背中で小さくなっていったモモタは、兄たちの活躍を目にして嬉しそうに尻尾を振っていた。

ダウラギリクラブたちよ。

お前たちの尊い命は俺たちが極上の料理の数々に変えてやる。

俺たちの血となり肉となり、貴重な戦いの経験となるのだ。

そういうわけで、もう少し狩らせてください。

ダウラギリクラブをある程度間引くことに成功した俺たちは、プニさんが引く馬車でトルミ村に続く街道を進む。

「プニさんは空を飛んで帰ることを望んだのだが、モモタが上目遣いでもじしながら「ばしゃでかえつちゃだめ……？」なんて聞いてくるもんだから、よし馬車でゆつくり帰りましょうとなつたわけで。蒼黒の団の総意です。」

カニ養殖場があるフォルトヴァ領からルセウヴァツハ領のトルミ村まで馬車で二十日以上道の程。馬車で一泊したら飛んで帰ることをプニさんに約束し、のんびりごとごと馬車移動。

コポルタたちの活躍でカニの間引き作業はあつという間に終わった。スツスは見事女王ガニを一匹倒し、号泣しながら喜んでた。

カニ養殖場を再度掃除し、女王ガニは卵を守る雄たちともども一匹残して全て狩らせていただきました。またすくすく育つておくれ。

俺たちの馬車リベルアリナ号は、エルフたちとユグルたちとドワーフたちの魔改造が勝手に施され、今では十二畳くらいの個室が六つと、中央に大きな円卓を設えた四十畳の居間がある快適無敵空間になっていた。

円卓では数十人が同時に座り、食事ができるのだ。

「おいしい！ おいしいよ！」

「たまごがこんなに美味しいなんて知らなかったよ！」

「ピュピュー？」

「ビーにもこれあげる。とっても美味しいよ」

「ピュイー！」

俺とスツスがそれぞれ専用の台所でカニ料理を作る最中、クレイとプロライトは食べつつカニの身ほじり、コポルタたちにはわいわいと食事を楽しんでもらった。馬プニさんはカニミソ入りのごぼうサラダをコポルタたちに食べさせてもらいながら馬車を引き、スキップしている。器用だな。

馬車は地面から僅かに浮いているためプニさんがスキップしても振動は一切ない。車輪が動いているのは見せかけだけ。

「ぼくたちが食べていたカニと違うよ？ どうしてだろうね」

「うむ。俺が思うに、北の大地のカニは飢えていたのではないか？ お主らが飢えておったように。だがこのカニは草を食み、時折谷に迷い込むモンスターを食っていた」

「ああそうか……お腹がいっぱいだったんだね！」

「そうか、お腹がいっぱいになると、モンスターは美味しくなるのか！」
いやそういうわけじゃないけどね。

クレイのざつくりとした説明に納得したコポルタたちはやんやんやと喜び、茹でたカニを卵で和えた丼をかき込む。

カニは肉をほじるのが大変なのだが、それは小さなカニだけ。小さいと言っても巨大なトラバガの倍以上はあるのだけど。

クレイとプロライトは興奮冷めやらぬコポルタたちの話を聞きながら、慣れた手つきでカニの肉をほじる。

それぞれの手には片方がフォークで片方がスプーンの、いわゆるカニスプーンが握られていた。この特製スプーンはクレイの大きな手でも扱えるように特注した。手の大きさを測ってから作ってもらったのだ。

トルミ村にはほぼ隠居生活をしている鍛冶職人のグルサス親方が滞在している。いや、既に立派な鍛冶場とドワーフ館を造っていたので完全に移住したのだろう。

いつかグルサス親方にカニスプーンを作ってもらえないか考えていたが、この機会に作ってもらうことにしたのだ。

暇つぶしに作るから報酬はいらないと言われたので、代わりにベルカウムで仕入れた麦酒を樽ごと進呈。キンキンに冷やしてあげたらこれは美味いと叫んでいた。次からも冷やしてくれと頼まれてそうだ。

凄腕の鍛冶職人であるグルサス親方に得体の知れないものを作ってくれなんて気軽に言えるのは

タケルだけだ、なんて雑貨屋のジェロムに叱られた。

「兄貴兄貴、次は何を作るんす？」

「次はやっぱり天ぷらかな。殻はでかすぎるから取り除いて、足の身を裂いて小麦粉と卵をつけて」

「ふんふん。天ぷらはごぼうの天ぷらと同じ作り方ですか？ 一度冷やしたほうがいいんすよね。水取ってくるっす」

馬車には俺の身長に合わせた台所と、スッスの身長に合わせた台所が二つ隣り合わせになっている。

食材を腐らせずに冷凍保存できる倉庫もあり、スッスはそれがスッス専用の保存庫だと知り喜んでた。今も嬉しそうに保存庫の中にある飲む用に砕かれた氷を探している。

スッスは俺が一度教えた調理法はきちんとメモを取り、一度メモを取ったら同じことを聞かず、実行し、応用することができる。アレンジ料理だってお茶の子さいさいなのだ。なんて素晴らしい。「米は追加で炊いたほうがいいかな。昼食用に二十升炊いたんだけどな……」

一回でまとめて十升くらい炊ける大釜もグルサス親方に作ってもらった。鍛冶職人に釜を作らせるなんてとジェロムに叱られた。暇だから何か作らせると言ったのは親方です。

「ビー、お代わりは？」

「ピュピュ」

「うん？ たくさん食うと夕飯が入らなくなるって？ おいビー、お前そんな計算できるようになってたのか？」

「ピュイッ！ ピュピュー」

むんつと胸を張ったビーは、夕飯がトサルタラ鳥の肉とラトト鳥の卵の親子丼だと知っている。トサルタラ鳥はトルミ村近辺の森の中にいる、七面鳥のような強面の鳥。エルフ族が日課のように毎日狩ってくるので、トルミ村で新鮮な鶏肉が食べられるようになった。

エルフ族とユグル族が手を取り思う存分改造し、そこにドワーフ族が俺らにも手伝わせるやと割り込み造り上げた馬車リベルアリナ号。

以前の馬車も快適無敵だったのだが、今の馬車は驚異的な進化を遂げている。進化というか、魔改造というか。

見た目と重さはプニさんが気に入っているんで、それが変わらなければ中身は勝手にいじつていいと言ったのは俺だ。確かに俺です。ええ、俺でした。

だがしかし、まさか部屋の大きさが倍になるとは思っていなかった。

豪華な応接セットが追加され、扉つきの洋服箆笥、扉つきの棚、それぞれの部屋に背丈に合わせて洗面所、用を足したら瞬時に消えてしまうトイレもあるよ。

中央の居間はコポルタ十名が乗って走り回っても狭さを感じないのだから、よい仕事をしてもらったとは思う。

だがしかし、「技術を集約したらどうなるのか実験」と言って馬車改造の対価を支払わせてはくれなかったのだ。ちなみに木工職人のペトロナは、リベルアリナ号を参考にして小規模の浮かぶ馬車を造りたいらしい。馬車はトルミ特区とベルカイムを繋ぐ重要な交通手段となるだろう。

現金を拒むなら他に何で感謝を伝えればいいのか。

俺たちは思案し、断りづらい贈り物押し付けようということになった。

エルフ族にはリベルアリナのキノコ帽子から生えてくるキノコを大量に収穫して押し付け、ユグル族には巨大なミスリル魔鉱石を押し付け、ドワーフ族には扱ったことがないと断っていた憧れの鉱石、拳大のアポイタカラ魔鉱石を押し付けたらひっくり返った。

リベルアリナのキノコ帽子というのは、小人サイズのリベルアリナが被っている椎茸のような大きな傘のキノコ帽子のことだ。

あのゲテモノ、じゃなくてリベルアリナがあげるワあげるワと言っていたが、本当にもらうとは思っていなかった。気がついていたら俺の鞆に入っていたのだから、ちよつと恐怖。

このキノコ帽子、リベルアリナの加護なのか怨念なのか、指で摘める小さなキノコ帽子から多種多様のキノコがもりもり生えてくるようになったのだ。かなり恐怖。

全て食用なのだが、俺が食べたことのあるキノコ限定。数回食べた程度の珍しいキノコは、味と形をしっかりと記憶していなければ生えてこないらしい。便利っちゃ便利なキノコ帽子だ。

エルフ族はリベルアリナを信仰しているので、キノコ帽子から生えてきたキノコをあげたらそれ

はそれは喜ばれた。しばらくお供え^{そくえ}してから皆で食べるんだって。美味しく食べるといい。

ユグル族は魔法の研究に余念がない種族なので、魔力を補^{おぎな}うミスリル魔鉱石を献上^{けんじょう}。もったいないとか恐れ多いとか言われたけど、必要とする人が上手に扱ってくれたら良いのだと言ったら喜ばれた。

俺の鞆の中にあつたミスリル魔鉱石はビーの親御^{おや}さん、東の大陸の守護神である古代竜ウォルデアスにもらつたもの。

あれだけ大量に消費したというのに、なくなる心配がしないんだよね。なんでもかな。ふしぎだね。いつの間にか鞆の中にミスリル魔鉱石が^{おぎな}あるんだよ。ふしぎだね。

ドワーフ族にあげたアポイタカラ魔鉱石は、リザードマンの英雄たちが眠る地下墳墓^{カタクンベ}の墓守^{はかもり}、エデンの民^{たみ}のリビルガンデ・ララからもらつた——とかこれも押し付けられたものなんだけど、宝物庫にアポイタカラ魔鉱石があるとヘスタスの馬鹿が馬鹿なこと考えて馬鹿みたいに盗むからあげる、と言われたのだ。

アポイタカラ魔鉱石はマデウスにある魔鉱石のなかでも群を抜いて貴重なもの。ミスリル魔鉱石よりも魔素含有量が多いから扱いは難しいらしいが、ヘスタスが馬鹿やるくらいならば有効利用してくれそうなドワーフ族、グルサス親方にあげちゃえばいい。

グルサス親方はなんてものを押し付けやがる、なんて怒鳴^{どな}ってきたけど。顔がニヤけて今すぐにも使いたくて落ち着かないようだった。これもまた、ドワーフ族の技術向上のための協力ってこ

とで。

「天ぶらが揚がつたつすよ！ お代わりいる人はいるつすか！」

「はいっ！」

「わんわんっ！」

「スッス、俺にも頼む」

「スッス、わたしも食べるのじゃー！」

さつくりと揚がつた天ぶらは、お好みの調味料でどうぞ。お勧めは塩のみだけでも、自作のめんつゆに大根っぼい野菜のおろしを入れたつけ汁が好評のようだった。大根っぼい野菜は真っ青^{さび}なんだけども。真っ青なおろしはめんつゆに入れると真っ黒になりました。

俺とスッスも料理の合間に食べているが、やはりカニは美味い。

以前のダウラギリクラブよりも今回のダウラギリクラブのほうが身が詰まって肉厚になり、カニ汁もより甘く感じられる。

これからも忘れずに養殖場の掃除をしに行こう。餌にもこだわるべきかな。

討伐したカニを収穫するため六畳サイズの巾着袋を十数個持っていたのだが、その全てから足がはみ出るほど保管できた。俺の鞆の中には大型バスサイズのカニが数えきれなくらい入つているのと、四匹の女王と、大量の卵。

カニは半分を馬車の保管庫で冷凍保存。残り半分を俺の鞆に保存。これでとうぶんカニ料理を楽



しむことができる。

コポルタたちは腹いっぱいになりカニを平らげ、その場で仰向けになって眠ってしまった。ぷすぷすと鼻をひくつかせて眠る彼らの姿は癒される。歯を磨いてから寝なさいと言えなくなる。

そういえば、村で留守番をしてもらっているあの奇妙な守護聖獣も大の字になって眠るようになったなど思い出して笑う。

「ピユイ？」

食後のデザートにキノコグミを食べていたビーが、どうしたのと問う。

「ルカルウとザバのこと考えていた。ちゃんと朝飯食っているかなって」

「ピユウーイ」

ランクSの獰猛なモンスターに追いかけて回され、トルミ村に落ちてきた有翼人のルカルウと守護聖獣のザバ。

生まれつき喋ることができないルカルウは、綺麗な真珠色の翼を持つ有翼人の子供。だが片翼は変形してしまっていて、上手に飛ぶことができないのだとザバが教えてくれた。

ヘスタスが投げた槍が彼らの住む浮遊都市、キヴォトス・デルブロン王国の聖堂にぶち当たったせいでルカルウとザバは空に浮かぶ島から落っこちてしまった。

その詫びと聖堂の修復、ルカルウとザバを故郷に戻したいとは思っているのだけでも。

なんせ幻の都市と幻の種族。どこそこを飛んでいるよとか、こういった種族だよとか、そんな文

献を読んだことがないのだ。

「子らが見張っておるのじゃ。案ずることはあるまいて」

プロライトがカニの殻を魔法の中着袋に詰めながら笑う。

ルカルウとザバはすっかり村に慣れ、今ではルカルウが幻の有翼人であることなど誰も気にしない。間違ったことをしたら注意し、悪戯いたづらをしたら叱る。食事のマナーを学んだり文字を学んだりと楽しそうに暮らしている。

故郷を思つて悲しげにため息をつくというのではなく、夜もすやすや眠り朝まで起きず、三食とおやつを美味しそうに食う姿はトルミ村の子供たちと何ら変わらない。

実は俺たちが知らないところで故郷を思つて悲しんでいるのかもしれないのだが、ルカルウたちが独りきりになることは決してない。

ルカルウの傍には村の子供たち、コポルタの子供たち、エルフにユグルにドワーフに獣人にと、村に住む子供たちが付きつきりている。眠る時も子供たちは団子状だんごじょうになって眠っている。

共に学校に通い、農作業を手伝い、一つ釜の飯を食う。

もうこのままトルミ村に住んじやえばいいのに、とはガキ大将であるリックの言葉。

俺も同意してやりたかったが、ルカルウはまだ子供。故郷の両親や友人が心配しているだろう。

キヴォトス・デルブロン王国は幻と言われていた、既に滅んだとされる島だ。

何百年も存在がわからなかったものを探そうとしたところで、すぐに見つかるわけではない。そ

のため王都とトルミ村を歩き来するグランツ卿きんぎょうに、有翼人に関する文献はないか探してもらつている最中。僅かでも手がかりがあれば、グランツ卿に託した通信石で教えてくれるはずだ。

早く故郷に帰りたいとか、未知なる国へ行けるかもしれない期待とか、そういった思いもあるのだけでも。

何故なぜだかはわからない。

説明しようにもできない、どうにも気になることがある。

俺の中にほの暗い予感がずっとある。

襟足えりあしがちりちりとした警告ではない。今すぐに何か危険なことがあるわけではない。それはわかる。

だけど、ずっとずっと。ルカルウとザバが目覚めたあの時から、ふとした時に感じる。

忘れることができない妙な気持ち。

これは何なのだろう。

カニ狩りと、経験と。

「はい、毎度あり！ 続いているお客様、はい、はい、大盛り焼き握り飯弁当一つ！ お茶つけます？ 美味しいですよクク茶。 はいお茶ひとつ！ まいどー！」

おかしいな。

なにゆえ俺は額に汗して握り飯弁当を笑顔で売っているのだろう。

グランツ卿との待ち合わせに、この場に來ただけのはずなのに。

少し前、俺はトルミ村の私室で久々の休日を楽しんでいた。

北の大陸に拉致られてアレコレあって、トルミ村に帰ってきてても街道整備で毎日奔走して、ランクスモンスターの襲撃やら魔法の修業やらで完全な休みはなかった。

ぐだぐだしたいと願っても、働きの住むトルミ村で引きこもる自信はない。そもそも早朝からビーに起こされるので二度寝もできない。

だがしかし、心優しい村人たちは俺を休ませてくれたのだ。毎日どこかで何かしら何かをしている俺に、休めと言ったのだ。なんたる幸運。なんたる幸福。

そんなわけで早朝ビーにベロベロ起こされ、朝ご飯を食べ、子供たちにシャボン玉液を作り、砂と棒だけで遊べる棒倒しを教え、ケンケンパーを教え、大人たちにトランプゲームを教え、あれれ遊んでばかりじゃない？ 俺。と、気づいたので昼前に私室に戻って読書をすることにしたのだ。

ビーは子供たちとシャボン玉で遊んでいるし、久しぶりの一人の時間。

ちよつとお高めのお紅茶でも淹れちゃおうかしら、なんてお湯を沸かそうしたら通信石が光りましてね。ええ。

王都に一時帰還しているグランツ卿からの通信は、国王陛下が王族だけが利用できる書庫でデルブロン金貨について記された文献を見つけたとのことだった。

いやちよつと待ちなよグランツ卿、なんで国王陛下まで巻き込んでいるのさ。

そりゃルカルウとザバを故郷に帰すため、俺たちはなんとかできないか考えた。

幻の浮遊都市の在処、有翼人の謎などが記された本が残っているならばと。

ベルカウムにある図書館には歴代ルセウヴァツハ領主が収集した蔵書がある。しかし、そのなかには浮遊都市について書かれた本はなかった。魔法で探したから間違いはない。

それならば手っ取り早く王都の図書館かな、そのうち行かないとなーとは思っていた。

「……それがまさかすぐに來いって話なわけですよ」

「タケル兄ちゃん何言ってるの？ ごぼう天ぶら揚げだったって！」

「はいまいどー！」

チリチリに揚がったごぼうとニンジンの天ぶらを山盛り追加したのは、王都で宿屋「鮭皮亭」を経営する猫獣人一家の長女ユーリ。

久しぶりに会った長女は立派な握り飯弁当販売員になっており、売り切れの看板を出すだけの仕事から弁当販売の担当になっていた。

妹のミリーとソーリも、幼いながら母親のクミルさんのようにてきぱきと細やかに動く様子がだなあと感心する。

出会った時はよちよち歩きだった末っ子のソーリが、今やお湯を沸かすことができるようになっていた。子供の成長、速い。

握り飯弁当屋は蒼黒の団が国王陛下の命をお救いした褒賞として造ってもらったのだ。今や王都内に六ヶ所の店舗で展開中。大人気。連日大行列ですつて嬉しいこと。

グランツ卿は類似品との差別化を図り、「エペペ穀を使った握り飯及び握り飯の入った弁当」を商業ギルドにて商標登録した。俺が勝手に商標登録と呼んでいるが、そんな感じの権利を主張したらしい。

「握り飯弁当」という名前と正式な調理法が使えるのは、鮭皮亭と調理法を完璧に覚えた料理人がいる支店のみ。調理法を教えるのは、鮭皮亭の主人ユルウさん。

鮭皮亭に隣接する握り飯弁当屋を元祖・握り飯弁当販売店にしたのは、エペペンテツテという家畜の飼料が米だと気づいた俺がどうかこうにか炊いて食えないか試行錯誤していた際、手

伝ってくれたのがユルウさんだからだ。

エペペンテツテ。

一般的にはエペペ穀と呼ばれる穀物は、今や王都では普通の食材として扱われている。トルミ村ではより美味しく育たないか品種改良に取りかかっているが、それはまだ秘密。

俺としては鮭皮亭の一家がひもじい思いをせず元気に働けたらそれで良い。

名前や調理法などの使用料は膨大な額になるらしいが、全てグランツ卿に任せている。

グランツ卿が必要だと思ふところに寄付すればいいじゃないかと言ったら、お前は欲がなさすぎると叱られた。

だったら王都に来るたび食事代を無料にしてくれと反論したらば、何故か王都に蒼黒の団の別荘ができました。何故かグランツ卿の館のお向かいさん。おかげで転移門が屋敷内に置けるようになったけども。

初王都のスイーツは興奮を隠せず、しばらく目と口を開いたままで固まっていた。開いた口にビーが指を入れようとしていたのに気づかず、ずつと固まっていた。

今は別行動をしているが、王都を満喫しているだろうか。

「クミルさん、かき揚げ天ぶらも美味しいと思うんだけど、新鮮な小エビが手に入らないからなあ。ルカニド湖だっけ？ あそこではエビの養殖ってやっていないの？」

「エビ、ですか？ 聞いたことがないですけど、どうかしら。あたしらが知らないだけかもしれないま

せんけど、カキアゲってなんです？」

「天ぶらの一種なんだけど、いろんな具材を混ぜて揚げるんだ。ごぼうに小エビとか小魚を混ぜたらもって美味しい」

「あらあらあら！ 美味しそう！ 小魚ならありますから、すぐにできるかもしれないわ！」

女将のクミルさんは……ちよつと横にポリウムが増した気もするが、健康つてことで。

宿屋を営む鮭皮亭一家には、スツスが加入する前の蒼黒の団が大変お世話になったのだ。

国家転覆を企む鮭皮亭一家には、スツスが加入する前の蒼黒の団が大変お世話になったのだ。国家転覆を企む鮭皮亭一家には、スツスが加入する前の蒼黒の団が大変お世話になったのだ。というか、国王陛下暗殺未遂にまで発展した事件に巻き込まれていた俺たち。まさか王都に来てランクA十のモンスターと戦うとは思わなかった。あの巨大な蛾は恐ろしく強かった。

鮭皮亭一家は揃って猛毒のイヴェル毒を知らずに摂取させられ、イヴェル中毒症の初期症状である色覚異常と、味覚嗅覚障害を発症。

宿屋の料理人で一家の大黒柱であるユルウさんは美味しい料理が作れなくなつたと嘆き、鮭皮亭は料理を作れば悪臭を放つ宿屋として嫌悪されていた。

だがイヴェル中毒症から回復したユルウさんは持ち前の料理の腕を大いに発揮し、美味しい料理を作れるようになった。宿屋経営は見事回復。

本来ならスツスの顔見せをしたかつたのだが、俺以外の蒼黒の団団員には大切な用事があるのだから。ちなみにプニさんは今回同行しておらず、どこかの空を飛んでいる。王都まで転移門で行くと

言つたらつまらないと拗ねたともいう。

「タケル兄ちゃん！ お母ちゃんとのんびりお話ししていないで！ また行列が伸びちゃつた！」

「はいはい！」

ミーリに叱られた俺は、追加の握り飯弁当を抱えて売り場に戻る。

俺が考案した握り飯弁当は評判が評判を呼び、今では午前と午後の数量限定にしても毎日売り切れる大人気商品になっていた。

鮭皮亭では握り飯や丼もののご飯が食べられるため、宿泊のほうも毎日満員御礼。建物自体も改築や増築をしたらしく、以前の優しくて落ち着く雰囲気を残したまま広々とした宿屋になった。

それで、グランツ卿と待ち合わせの時間になるまで俺だけ座ってお茶していると落ち着かなくて働かないやつは食うんじゃない精神が働きましたね。元祖・握り飯弁当が売り切れるまで手伝うことにしました。

ごぼうの天ぶらは魔素ありと魔素抜ききの二種類が用意されている。

魔素耐性があり、魔力補充をしたい人は本来のごぼう天ぶらを買えるが、魔力が多くない人には味は同じでも魔素含有量を極限まで減らしたごぼう天ぶらを販売。

北の大陸で発見した真つ黒の樹木、エラエルム・ランドの枝がごぼう。見た目まんまごぼうで、味もごぼう。

見た目はアレだが料理したら美味しい。煮ても焼いても炒めても漬けても美味しい。乾かしてお茶

にしても美味しい。

グランツ卿がトルミ村でごぼうの味を知り、早々に巖屑の商会を通してトルミ村から定期的に購入するようにしたらしい。

今のところ東の大陸内でごぼうが食べられるのは、エラエルム・ランドが植えられているトルミ村とエルフの隠れ郷のみ。まだ量産はできていないが、リベルアリナの恩恵ですくすくわさわさと成長中。

ごぼうに惚れ込んだグランツ卿が王都で滞在中も食べたいと言い、ユグル族と交渉を経て鮭皮亭で元祖・握り飯弁当のおかずとして限定で売られるようになった。王宮内でも愛好家がじわじわ増えていくらしい。

「ええっと、魔石が赤だと赤のお盆のごぼう天ぶら」

「そうよ。青だったら青色ね」

ごぼう天ぶらは好評だが、販売する時に魔石で魔力鑑定をするのが決められている。

白色の魔石が赤色に変化したら魔素がほとんど含まれていないごぼうを売り、青色に変化したら魔素たっぷりのごぼうを売る。

常連客でもその日の体調によって魔力量に変化したりするので、魔力鑑定は必須。

貴族は貴族街に専門店があるため、そちらで代理人が購入し、主人に食べさせるらしい。

買ったあとで魔素たっぷりのごぼうを食べて急性魔素中毒に陥っても、販売店は一切の責任を負

わない、という看板を掲げている。

販売初期は忠告を聞かないで急性魔素中毒になる人もいたが、ごぼうは大公閣下であるグラディリスミュール家のお墨つきであり、お気に入り。販売先に文句を言うことは、ごぼうを薦めた大公に文句を言うのと同じこと。

大抵の庶民は背後に貴族がいるというだけで恐れ多くなり、店を利用する際下手な真似はしてはいけないと己を律する。そして、名のある貴族が保証しているという圧倒的な信頼の下、安心して買い物をするのだ。

面倒なのは貴族相手ではあるが、国王陛下の叔父である大公を敵に回してまで己の利を追求するような貴族はアルツェリオ王国には存在しない。

そもそも急性魔素中毒になるから気をつけてと注意しているのに、急性魔素中毒症ってどんなもんだと試す馬鹿があとを絶たないのだ。魔法学校の生徒とか、教師とか。冒険者も救護院に担ぎ込まれたという話を聞く。

そういった面倒を引き受けてくれるグランツ卿を案じ、一律して魔素含有量が少ないごぼうを売ればいいじゃないと言ったのだが。

「不思議と疲れが取れるようだな」

「味も美味しいし、食べやすいし」

「俺、ごぼうの天ぶらも好きだが、唐揚げも好きだな」

「わかるわかる。美味しいよね唐揚げ」

店先のイトインスペースで和気あいあいと昼食を楽しむのは、いかつい騎士服を纏った若者。王都を守る竜騎士たちだ。

「前より握り飯を増やしてくれたる？ そのぶん割増しになったけど、黒パンと葡萄酒の飯には戻れそうにないな」

「そうだそうだと笑い合う彼らは、青色お盆のごぼう天ぶらを食べている。

竜騎士や騎士、冒険者、魔導士、錬金術師、治癒術師らは日頃から積極的に魔法を扱うため、魔力保有量が多い。そういった職業の人たち向けに魔素含有量が多いごぼうも扱っているのだ。

今のところ大公が独占して調理したごぼうを販売しているが、ごぼうの扱いに慣れたら市場や商店などにも卸す予定。皆ごぼうの虜になるといい。

弁当の残り数が決まると、末っ子のソリーが「本日売り切れ御免」の看板を外に出す。

すると外の列から「嘘だろー」「だから早く行こうって言ったのに！」といった悲鳴が聞こえてくる。続いて「四番街の店ならまだあるかも！」という声も。

山と積まれた弁当が次々と売られていくと、俺が手伝い始めてから四半時で午前の部が終了となった。

「タケルさん、助かりました。お待ち合わせなのに手伝いをしていただいて」

「いえいえ、予約もしていないのに弁当二十個もいただいてしまったんですから、これくらい」

「蒼黒の団の皆さんの注文は何よりも優先するのが決まりです。ご遠慮なさらずに。王都内のどの店舗に行っても、タケルさんたちなら毎日無料で好きなだけ提供しますよ！」

炊事場の奥から出てきたのは、料理長のユルウさん。

毎日とんでもなく忙しいだろうに、忙しいのは嬉しいことだと豪語してしまう仕事中毒者。だが放っておくと働きすぎるので、七日に一度は家族で休んでくれと頼んだのは俺。

ユルウさんの他に料理人が六人。そのなかの一人は、胸に金の王冠のバッジ。あの人は宮廷料理人だ。宮廷料理人まで握り飯の調理法を学んでいるのか。王宮内でも握り飯を食う気だな。

短時間労働ではあったが、僅かな時間でこの疲労感。久しぶりの接客業に緊張したし、少し楽しんでしまった。

「ピュイピュ」

店の奥からこっそりと姿を現したのは、水色のレインボーシープの毛をかぶった変装中のビー。もともとこだったはずの毛が少々ねちちより濡れているのが気になる。

「挨拶はできたのか？」

「ピュイツ、ピュイピュイピュイピュ」

「歓迎の歌を歌われそうになったって？ そりゃあ……天変地異の前触れだと思われそうだから遠慮して良かったな」

「ピュイ！」

「ああ、だからねっちより濡れているわけな。大歓迎と寿ことほぎの代わりが舐なめ回しか。うん、臭におうので清潔けつせつな」

「ピュピュッピュピュー」

独特の生臭なまぐささのままビーを放置するわけにはいかない。魔力を調整して光を抑え、ビーにだけ清潔魔法がかかるようにする。

王都に来てビーは竜騎士の絆きずなの飛竜トウリウたちに挨拶をしに行った。挨拶をした際、成竜の姿を取れるようになったと報告したのだろう。竜たちは古代竜の子供であるビーが成長したと喜び、大合唱するところだった。

竜の歌は「ギャアツ、ギャアアツ」という叫び声なので、何も知らない人たちが聞けば竜に何があつたのだと騒さわぐだろう。

ビーは竜たちに歌を控ひかえてもらった。そうしたら舐なめ回された。

「お疲れさん」

「ピュピュー」

水色のもこもこを膝ひざに乗せて一息つくと、外でくつろいでいた竜騎士たちに別の竜騎士が合流し、何かをひそひそと話し合つたと思つたらそれぞれ弁当を抱えて走りだした。

一般市民が巻き込まれるような事件が起きたわけではないと思うが、竜騎士たちがあんなに急ぐなんて。

「ピュプ？」

「うん。どうしたんだろな」

大通りで誰かが喧嘩けんかでもしているのかな、それなら俺たちは関係ないよねーと。

エルフの伝統料理である焼き菓子、マヌケスを広げて鮭皮亭の従業員らとお茶会を開いていたらば。

「蒼黒の団、素材採取家のタケル殿はおられますか！」

大声で俺を呼ぶ声でした。

＋＋＋＋＋

群衆の大歓声。

空に響き渡る轟音こうおん。

大勢の見学者に囲まれた闘技場の中央、一人は直立したまま、もう一人は地に寝そべっている。

ギルドの裏手に併設されている闘技場は、サッカー場くらいの広さがある。ギルド所属の冒険者や職員は自由に使用できるうえ、たまにランクアップ試験も行われる。

冒険者ランクを上げるには、一定数の依頼を完璧にこなすか、ギルドが提示する条件つきの依頼をこなすか、自分より上のランクの冒険者と戦わなければならない。

握り飯弁当を食っていた騎士たちの姿が見える。この騒ぎを聞きつけ、見物に来たのだろう。ものすごい数の見物人だ。

今回俺たちが王都に来たのはグランツ卿と呼ばれたからだけではない。クレイとブロライトとススのギルドランクを上げるため、でもあった。

俺のランクはFBランクのままがいい。Aランクの採取家である必要がないからな。現状クレイとブロライトのランクはA。ススはランクC。

彼らは壮絶な修業を経て大幅に強くなった。そりやもう引くくらい強くなった。

ただ突っ立っているだけで身に纏うオーラというか、竹まいというか、雰囲気が劇的に変化したため、ギルドからランクアップ要請があった。

ベルカイムのギルドエウロパのギルドマスター、巨人族のおっさんロドルが頭を下げて頼んだのだ。ギルドに所属しているのなら、強くなったのなら、相応のランクでいなければならぬ。だからさっさとランクアップしろと。最後はほぼ脅迫だったと言っまい。

クレイとしては今更冒険者ランクにこだわりはない。ただ、ランクSに昇格すると別格の冒険者として扱われ、指名依頼がなくなる。国から強制的に徴兵されるが、平和なアルツェリオ王国で戦鬨に駆り出されることはほぼない。

他の冒険者たちからの推薦をしこたまもらったクレイたちは、王都のギルドキュレーネにおいてランクアップ試験に挑んだわけなのだが。

今闘技場に立っているのはスス。倒れているのは誰かな。あの大きさと巨人族っぽいけど、彼はどうしたのかな。

「タケル殿、申し訳ありません。まさかこんなに盛り上がるとは想定外です」
俺を鮭皮亭まで呼びに来たのは、グランツ卿の従者だった。

鮭皮亭で待ち合わせをしていたはずんだけど、グランツ卿が少しだけランクアップ試験の様子を見たいと言いだしたらしく。

そのグランツ卿は闘技場が見渡せる貴賓席で前のめりになっている。大公閣下が何やってんの。

「ピュ」
「ススはどうしたんだ。相手は倒れているようだけど」

雑踏のなかかき分けて関係者席まで案内されると、王都のギルド職員たちが興奮しながら教えてくれた。

「あの小人族が、一瞬にしてランクBのジェダワを倒したんです！」

「ジェダワはあの巨体で俊敏な動きをするのに、一歩も動いていなかった！」

「小人族が毒でも使ったんじゃないか？」

「なんだ？ 何の毒を使ったんだ」

「ピュグッ」

ギルド職員の言葉にビーが反論しそうだったが、俺はビーの口を押さえて声を上げる。

立ち読みサンプル
はここまで

「うちのスツスはそんな真似しません。大体、確証もないのに憶測だけでもを言うのはギルド職員としてどうかしちやっっていると思うんですけど！」

スツスにあらぬ疑惑をかけられてはたまらない。俺は声を張り上げて毒を使ったと言った職員に反論すると、職員は俺が蒼黒の団の団員であることに気づき慌てて謝罪をした。

「ピュピ！」

ビーが指さした先、闘技場の真ん中で立っていたスツスが、急におろおろと走り回り倒れた冒険者へと駆け寄る。スツスは何か叫んでいるな。

「鳩尾みそねに深く入れてしまったっす！ 誰か回復薬ポーションくださいっす！ 内臓ちよつと潰したかもしれな
いっすー！」

慌てふためくスツスの傍に治癒術師が向かったようだ。

内臓ちよつと潰したんだって。ヒエツ。

スツスの修業相手は屈強くつきやうなオグル族。オグル族は巨人族グアイマンより背は低い、その肌は鋼のように硬い。クレイの鋼鉄こうてつの皮膚ひふと似たような感じ。スツスは修業でそんな相手と戦っていたのだから、加減がわからなかったのだろう。

見学者たちは小さな小人族が大きな巨人族グアイマンに勝利するとは思わなかったのか、勝手に賭け事にして負けたと叫んでいる。

「クレイとプロライトはどうしたのかな」

「彼のように瞬時に勝敗を決しました。武器を手にすることなく、揃すって素手すてで」

「なるほど」

とつとと決着をつけたということは、アイツら戦闘を長引かせて観衆を喜ばせるより、俺がもらった握り飯弁当が早く食いたいのだろう。

「武器を手にするまでもない、ということでしょうかね」

グランツ卿の従者が苦笑う。

そういうこつちやないんだけどもね。

武器を持たないことに深い理由はない。

今回は試験をする相手の強さを見極め、できることなら拳で一撃作戦だった。

ランクアップ試験で愛用の武器を使う必要はないし、拳一つで終えられるのならそれで良い。クレイとしては人前でわざわざ己の技能を見せる必要はない、むしろ見せたくないと言った。

それならばグーパンで良くね？ と提案したのは俺。相手を舐めているわけではなく、実際にそれだけの技量があるのならば文句を言われる筋合すじあいはない。衆人環視しゅうじんかんしの下で必殺技をいちいちお披露ひら目するほうがおかしいのだ。

俺たちは並みの冒険者が味わえないような戦闘を経験してきた。

絶対に殺してやんよと向かってくる大量のモンスター相手に、加減などするわけがない。どこを切り裂けば絶命するのか経験で知っている。どうやって苦しませずに素早く命を奪えるか。